

キリスト教
文学の世界
9

ディケンズ
ウォー
チェスタトン



キリスト教文学の世界

9

ディケンズ
CHARLES DICKENS

ウォー
EVELYN WAUGH

チェスタトン
GILBERT KEITH CHBSTERON

主婦の友社

〈筆・訳者紹介〉

- 田村隆一 1923年生まれ。詩人。
刈田元司 1912年生まれ。上智大学文学部教授。
森禮子 1928年生まれ。作家。劇作家。
出口保夫 1929年生まれ。早稲田大学教育学部教授。
井上ひさし 1934年生まれ。作家。
安西徹雄 1933年生まれ。上智大学文学部教授。

キリスト教文学の世界 9

ディケンズ ウォー

チェスタトン

昭和五十三年四月二十五日 第一刷発行

定価一八〇〇円

発行者／石川晴彦

発行所／株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台一六

郵便番号 一〇一

振替 東京二一八〇番

電話 東京（〇三）二九四一一一一（大代表）

印刷所／大日本印刷株式会社

もし落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か本社へお申してください。

目次

ディケンス

〈解説〉

一本の寝台柱

田村隆一 5

クリスマス・キャロル

刈田元司訳 12

人と作品

刈田元司

308

ウォー

〈解説〉

現代人は愛し得るか

森 禮子 77

華麗なる死者

出口保夫訳 86

人と作品

出口保夫

311

チェスタトン

〈解説〉

一人二役ということについて

井上ひさし

161

木曜の男

安西徹雄訳

170

人と作品

……安西徹雄

314

ディケンズ

〈解説〉

一本の寝台柱

田村 隆一

『クリスマス・キャロル』が発表されたのは、一八四三年、わが天保十四年のことである。

世界史年表を覗いてみると、この年の項目は、「マルクスがパリへ」「オーコンネルがアイルランド分離運動をおこす」「清が上海を開港」「上海に仏租界設置」「清が英を最恵国待遇とする追加条約を結ぶ」(アヘン戦争から三年目)「英がナタールを英領とする」「ブルー人が北に移動」などと記載されている。日本では、天保の改革がはじまって三年目、印旛沼の開発が行なわれ、江戸浅草に非人場が新設され、さまざまな奢侈が禁じられ、平田篤胤や為永春水が死没している。一八六八年、明治レポリュウシヨンの、何と二十五年も前のことである。と、こんなことを言うのは、早々とこういう立派な仕事をされたのでは、後世の小説家はさぞ困るだろうと、同情を感じ得ないからだ。

では、イギリスはどうだったか。

年表を借りて先に述べたように、まさに日の出の勢いという時期だ。ポンドの価値が下落したいまからは、想像もできない隆盛期だった。もちろん経済の面からだけ見ればの話だが。

インフレに苦しみながら、銃砲のかわりに経済戦争をつづけている現代ニッポン人と守銭奴スクルージの類似は指摘するまでもないが、そのちがいはまた大きい。この類似とちがいにについては後で述べるとして、まず、ディケンズについて。

一八一二年、チャールズ・ディケンズは、イングランド南部のランドポートに生まれた。

父は海軍経理部の職員。母は海軍士官の娘で、チャールズはその長男である。幼いころからフィールディング、スモレット、セルヴァンテスなどを読んだ。

父親が浪費家で、負債者監獄に入り、チャールズは十二歳で靴墨工場でレッテル貼りの仕事をした。

十五歳で速記を習い、二十歳のとき記者となった。以後短篇を発表しはじめ、二十四歳のときには、文筆家として一本立ちした。

そして、三十一歳のときに『クリスマス・キャロル』が書かれた。

三年後、『デイリー・ニューズ』の編集長。ピクトル・ユーゴーやアレクサンドル・デュマと交友を深める。

一八七〇年（明治三年）、六月八日、五十八歳で脳出血のために死亡するまでディケンズは作家として旺盛な創作をつづけた。

『クリスマス・キャロル』は、どちらかと言えば読みやすい小説だといえるだろう。平明な文章で書かれているという点からすればである。

キリスト教には、カソリックにしてもプロテスタントにしても、信者にならなければわからない言葉がたくさんある。日本人にはナジミのない、理解しにくい、信者同志の符牒のような言葉である。あるいはこの作品も、さまざまなイメージのなかに、キリスト教の教義や約束事がたくみに埋めこまれているのかもしれない。しかし、少し乱暴な言いかたになるが、そんなことにお構いなしに読んで行っても、ディケンズが言おうとすることはじゅうぶんわかるのではないかと、ぼくは思う。父のお墓をお寺にしたから、たぶんぼくはブディストに属するのだろうか、そのぼくの心をも揺さぶる力があるのがなよりの証拠である。

時代をへだてて、東洋の端にある国に住む一人の中年男が感動する——これはとりもなおさず、作者であるディケンズがどんなに書くことに心をくだいたかを示すのだ。ディケンズはいへんだっただけらしい。

それにしても、とぼくは考える。ぼくらのクリスマスは一体どうなのか。

ついこの前まで、クリスマスの夜は、クラッカーの細いテープや紙吹雪の紙さを肩にのせ、紙のトルコ帽をかぶり、手にはケーキの入った箱をさげてヨロヨロ歩くことだった。昨今は、ホームパーティーだと聞く。いずれにしても、キャバレーでもバーでもスナックでもレストランでもデパートでも、クリスマスは催し物のタイトルになる。なんだかそれだけのようないやがしてならない。いや、ぼくらのクリスマスは、この作品のクリスマスのように重大なものではないと言いたい直そうか。

重大なのは、この重大なものではなくなってしまったということだ。つまり、スクルージの生きかたと、クリスマスが両極で対峙している時代ではなくなってしまったということであ

る。時代のせいではなく、ぼくら自身のせいなのだが、クリスマスが、スクルージの生きかたを、批判することも、笑うことも否定することも、まして変えさせる力も、まったく失ってしまったことだ。この作品を読んでいると、だから、クリスマスがなぜそんなに怕いのかと、鼻白む思いも味わわなければならない。

だが、それならば、この作品はおもしろくもないか、と言うと、そうではない。言うまでもなく、人生の真実、それもおそろしい真実が、むしろ軽い筆致で描き出されているからで、この作品が読む者にあたえる感動ははかりしれないものがある。とくにぼくらのようにスクルージの生きかたを余儀なくされている現代のニッポン人には、あたえるものが大きいはずだと思う。

第四節の最初のほうを読んで、思わず自分自身の人生を振り返らない者がいたとしたら、ぼくはもう一度、この作品を最初から読み直すことをおすすめしたい。

「苦しさのあまり、かれは幽霊の手をつかんだ。相手は振り放そうとしたが、スクルージは必死の歎願で幽霊を引きとめた。幽霊は、だが、いっそう強くて、かれをはねのけてしまった。両手を上にあげながら、自分の運命を逆転させてもらおうと、最後の歎願をしているうちに、スクルージは、幽霊の頭巾と着物に変化を認めた。幽霊はちぢまって、くず折れると、だんだん細くなって、一本の寝台柱になってしまった」(P 69)

過去と現在と未来を遍歴したスクルージの両手に残ったものは、「一本の寝台柱」なのである。

おそらく、ぼくらに残されるものは、それだけでしかあるまい。そもそもクリスマスの意味など、わかってはいないからだ。そしてぼくらは空と海を汚しつづけ、山を削り、川を濁らせ、ひたすらインフレと闘いつづけて、「人生なんて、なんて虚しいものだ」と不平たらたらで癌におかされて死んでゆくのが関の山なのではないだろうか。そういうぼくらを、ディケンズは予言している。第三節の最後に登場する小さな男の子と女の子の姿を借りてだ。

「幽霊さん！ これはあなたのお子さんたちですか？」 スクルージにはこれだけ言うのが精一杯であった。

「これは人間の子供だ」幽霊はかれらを見おろしながら言った。「それなのに、わたしにしがみついて、父親よりはわたしの方に訴えているのだ。男の子は無知。女の子は欠乏だ。両方に気をつけなさい、また、こういう仲間たちに気をつけなさい、だが特に、この男の子には気をつけなさい、かれの額には、もしまだ文字が消されていないとすれば、滅亡という文字がはっきり見えるはずだから。見えないとは言わせないぞ！」（P 56）

「小さい一本の寝台柱」をただの寝台柱で終わらせてしまうぼくらとちがって、ディケンズは、第五節でスクルージを変えてしまう。スクルージとぼくらは似ているが、そのちがいも大きいと言ったのはこのことだ。

クリスマスの力によって、スクルージは変わる。ちがいは無限に大きいと言うべきだろう。

「伯父さん、クリスマスお目出とう！ 神さまの祝福がありますように！」と甥に言われ、「何を！」とこたえ、「くだらんことを！」とこたえていたスクルージが変わるのだ。ぼくらは

「神は死んだ」と言った哲学者の言葉ばかりを信奉していることをひとまずやめて、スクルージの変わりようをながめてみよう。

「スクルージは教会へ行き、方々の通りを歩きまわって、人びとの急ぎ足で右往左往する姿を眺め、子供たちの頭をなでたり、乞食に物をたずねたり、方々の家の台所をのぞきこんだり、窓を見あげたり、とにかく何でも自分に喜びを与えてくれることができることを知った。今まで夢想したこともなかった。散歩が——いや何でも自分にこんな大きな幸福を与えてくれることができるものだということを」(P 72)

スクルージの最高にうれしいことは、残りの人生で、残りの時でつぐないをすることができるということだ。

それにしても、とまたぼくは思う。

キリスト教とはなんと丈夫にできているのか、と。スクルージに無視されていたときも、「死んだ」と哲学者に言われたときも、神はちゃんとしたのだ。まさしくとんでもないねても大丈夫ではないか。だから、スクルージは変わることができた。

しかし、ぼくらは神を知らない。神を知らないスクルージなのだ。ジャングルベルをキャバレーのBGMにしてしまったぼくらにこそ、神の恩寵が必要なのではないだろうか。なぜなら、ぼくらもまた「一本の寝台柱」を求めて生きているからだ。それさえあれば、と思いながらだ。

＊

つい最近、ぼくの畏友、ディケンズの研究家である小池滋さんから、『ロンドン——ほんの

百年前の物語』という本を贈られた。ディケンズが生き、書き、死んだ十九世紀初頭から末にかけてのロンドン、産業革命によってラジカルに変貌をとげるこの大都会には、オペラと裁判所と青果市場が混在し、盗人、淫売、大貧民、失業者、テムズ河の河さらい、クズ屋などの赤裸々な人間存在の群れが渦まき、そのコントラストとして大英帝国のクライマックス、ヴィクトリア王朝と、その貴族たち、大ブルジョア、金融資本家、商工業の支配層の目もくらむような豪華な饗宴。この影の部分と輝きわたる部分とが地模様をつくりながら、ディケンズの全作品を産み出すことになる。なかならず、『クリスマス・キャロル』は、このロンドンなくしては、この世に生まれなかっただろう。

小池さんの『ロンドン』という本の扉には、P・B・シェリー『ピーター・ベル三世』第三部からの引用がしるされていて――

地獄はロンドンによく似た町――

人ごみと煙にあふれた町だ。

あらゆる種類の人間が破滅し、

面白いこと楽しいことはまるでなく、

正義はごく稀、

憐れみはさらに稀にしか見られぬ。

クリスマス・キャロル

A CHRISTMAS CAROL

刈田元司訳

第一節

マーリーの亡霊

まず最初に言っておくが、マーリーは死んでいるのだ。それについては一丁の疑いもない。かれの埋葬証明書には牧師、役場の書記、葬儀屋、喪主が署名した。スクルージも署名した。しかもスクルージの名前ときたら、かれがどんな仕事に手をつけようと、取引所では絶対信用があるのだ。

マーリー老人は扉の鉋釘みたいに死んだのだ。

いや、思い違いをされては困る！ わたしは別に、鉋釘について特にどういふところが死んでいるというのか、わたし自身の経験から、知っていると言うつもりなどないのだ。わたし自身は、棺桶の鉋など商売ものの金物のなかでは一番死んでいると考えたのである。しかしこの比喩のなかには先祖たちの智慧が入っていて、俗っぽいわたしの手でかれこれ干渉するわけにもいかず、さもなければ国も亡びるといふ次第。だから読者も、わたしが力をこめてマーリーは扉の鉋釘みたいに死んでいるとくりかえすのを許してもらいたい。

スクルージも、マーリーが死んでしまったことは知っていたのだらうか？ もちろん知っていた。どうして知らないわけがある

う？ スクルージとかれは、もう何年とも知れぬ永年の共同事業者だった。スクルージはかれのただ一人の指定遺言執行人、ただ一人の財産管理人、ただ一人の財産譲り受け人、ただ一人の余産受け取り人であり、ただ一人の友人、ただ一人の会葬者だった。しかも、そのスクルージでさえも、この悲しい出来事にひどく心を痛めたというほどのことはなく、葬式の当日も平素の商才を発揮して、間違いない取引でその日を荘厳にした。

マリーリーの葬式といえば、また出発点にもどるが、マリーリーの死んだことは疑いがない。このことははっきり頭に入れておいてもらわれないといけない。さもないと、これからお話しする物語が何の変哲もないことになるからである。たとえば、もしわれわれがハムレットの父君は劇の始まる前に死んでいるということを完全に信じていなければ、その父君が夜半、東風の吹くなかを、城壁をうろつき回ったといわれても、誰か中年の紳士が暗くなつて微風の吹く場所——たとえば聖ポール教会の墓地に、文字通りに息子の弱い心を驚かそうと無分別に出てくると同様、なんの奇怪事でもないのである。

スクルージは、マリーリー老人の名前は塗り消さなかった。数年たつても、なお倉庫の扉には、スクルージ・アンド・マリーリーとそのまゝあつた。この商会はスクルージ・アンド・マリーリーで通つていた。ときどき、仕事に初めての人は、スクルージのことをスクルージと呼んだり、ときにはマリーリーと呼んだが、かれはどちらの名前でも返事した。どっちだって同じだったからである。

ああ！ しかしかれは何という握りやの欲ふかだったろう、スクルージという男は！ しぼつて、もぎ取つて、掴んで、かき集

めて、握りこむ、貪欲な因業爺いんごうぢいだった！ どんな鋼鉄で打つてもおおらかな火の出たことのない火打石みたいに、固くて、鋭く、秘密を好む、打ち解けない、牡蠣かきのように孤独な人間であつた。心のなかの冷たさは老いこんだ顔付を凍りつかせ、尖つた鼻の先を折り、頬は皺しわよらせ、歩きぶりもぎくしゃくさせていた。また目は赤く、薄い唇は紫色に変わり、耳ざわりなききー声で意地のわるいことを口にした。白い霜が頭の上にも、眉毛にも、針金のように尖つた顎にもおかれていた。かれは自分の冷たい温度をいつも持ち歩いた。土用の最中でも事務所を氷のように冷たくしたし、クリスマスでも温度は一度もあがらなかった。

外の暑さや寒さはスクルージには大して影響しなかった。気温が暖かくてもかれは暖かくならず、冬の天候もかれを凍こえさせなかった。吹く風もかれほど無情ではなく、降る雪もかれほどしつこくはなく、どんな土砂ぶりの雨もかれほど無慈悲ではなかった。陰悪な天候も、どこでかれに勝ることができるか知らなかった。ただどんなにはげしい雨や、雪や、霞かすみや、震ゆれでも、一つの点でかれに勝ると自慢することができたであらう。つまりこういう空の現象は時には降つて有難いことがあるが、スクルージにはそれが無いということだ。

誰ひとり、道で、にこにこしながら、「おや、スクルージさん、ご機嫌はいかが？ いつうちに来ていただけますか？」などと呼びとめるものなどいなかった。乞食だつてかれにはびた一文ねだつたことはないし、子供たちも今何時かなどと聞いたことがない。またどんな男や女も、一生に一度だつて、スクルージにどこそこへ行く道をたずねたことがない。盲人の犬でさえもかれを知

っているらしく、かれのやってくる姿が見えると、主人をどこかの戸口か裏の路地へ引っぱりこんで、まるで「目のみえないご主人よ、意地悪な目なんかあるよりも、目などかえって無い方がいいですよ」とでも言うように、尾を振るのだった。

しかしスクルージは少しでも気にしたろうか？ いや、それこそかれの望むところだったのだ。人情などはさがっておれと警告しながら、人のむらがる人生の道に割りこんで進むのが、スクルージにとっては、通人のいわゆる「大好物」であった。

あるときのこと——一年の吉日中でも吉日のクリスマス前の夜——スクルージ老人は事務室に座って忙しく仕事をしていて。青ぐろくて寒い、肌をさすような天気であった。おまけに霧で、外の路地を入びとが、体が暖まるようにと両手で胸を叩いたり、舗道の石畳を忙しく踏みつけて、ぜいぜい声で話しながら行き来するのが聞こえた。町の時計が方々で三時を打ったばかりなのに、もう真っ暗で——一日じゅうあかるくはなかったが——隣り近所の事務所の窓には、手にもさわられそうな茶色い空気についた赤いみみだいに、蠟燭の焰がゆらめいていた。霧は隙間という隙間、鍵穴という鍵穴から流れこんできた。外も霧は深く、この辺の路地は一带がごく狭いの、向い側の家並がただ幻^{まぼろし}のように見えた。黒ずんだ雲が垂れこめてきて、なにもかも朦朧となるのを見ると、大自然が近くに住んでいて大規模に霧を製造しているんだと思う人があるかもしれない。

スクルージの事務所のドアは、書記をたえず見張れるように、開いていた。書記は水槽みたいな陰気な向うの小部屋で、手紙を写していた。スクルージの炉にある火は非常に貧弱であった。だ

が書記の方の火はもつと小さくて、まるで石炭のかけら一つくらいにしか見えなかった。しかし石炭箱は、スクルージが自分の部屋においておくので、かれは注ぎたすこともできなかった。書記が十能を持って入って行くものなら、きまって主人は、わしたちは別れなくちゃなるまいね、などと言うのだった。そこで書記は白い毛の襟巻をして、蠟燭で暖を取ろうとしたが、想像力の強くないかれでは、とてもできない相談だった。

「伯父さん、クリスマスお目出とう！ 神さまの祝福がありますように！」と快活な声で叫ぶものがあつた。スクルージの甥の声で、あんまり早くそばへ来たので、その声を聞いてはじめて、かれが来たのを知ったほだった。「何を！」とスクルージは言った。「くだらんことを！」

霧と霜の中を早く歩いて体が熱くなっている、このスクルージの甥は全身ほてって仕方がなかった。顔は赤らんで美しく、目はかがやき、煙のように白い息をはいていた。

「クリスマスがくだらないんですって？ 伯父さん！」と、スクルージの甥は言った。「本気で言っているんじゃないんですか？」

「本気だよ」スクルージは言った。「クリスマスお目出とうだって？ なんの権利があつてお目出たいのかね？ どういう理由でお目出たいのかね？ 貧乏人のくせに」

「それじゃ」と甥が陽気に答えた。「なんの権利があつて憂鬱なんですか？ どういう理由で氣むずかしくするんですか？ お金持のくせに」

スクルージは即座にいい返事を思いつかなかった、また